

새로 조성한 방파제가 하얗고 길게 늘어서 있다. 천막엔 그 동안 싸워 왔던 기록들이 전시되었지만 에메랄드빛으로 가득한 바다를 가로지른 방조제를 바라보는 그들의 얼굴엔 슬픔이 묻어 있었다.

국제대학강의

'이시우초청강의'는 의제를 발표하고 발표가 끝날 때마다 질문을 받는 형식으로 진행되었다. 오키나와 방문의 주요 이유였던 이시우의 강의 의제는 두 가지다.

첫째는 남·북·미 정상회담이 진행되는 근래에 일어난 매우 중요한 새로운 흐름을 핵을 보유한金正은의 의도에 의한 것일 수 있으며 이를 '공격적 평화주의'라고 주장했다. 그가 주장하는 공격적 평화주의는 아직까지 미국이 세계를 상대로 보여주었던 행동으로는 이해하기 어려운 트럼프라는 정치 이단아가 나타나 갑자기 일어난 실수가 아니고 "미국 중심으로 진행되어 가고 있던 힘의 균형이 조금씩 악화되는 과정이며 트럼프로 대변되는 자국의 이익에 민감한 정부가 들어선 미국이 취한 중요한 변화"라고 말한다. 또한 현재 벌어지고 있는 3국 정상(김정은-트럼프-문재인)의 협상과정을 이해하는 중요한 사유라고 말한다. 평화를 위해서 핵을 만들었다는 김정은의 태도를 읽기 위해서 필요한 새로운 시선이라는 것이다.

둘째 미국이 주장하는 유엔사령부의 실체가 유엔에서도 인정하지 않는 모순투성이의 억지 주장일 따름이며 사실은 아시아를 지배하려는 미국 패권주의의 불편하고 부끄러운 모습일 따름이라고 말하였다. "유엔의 어느 자료에도 유엔이 한반도전쟁에 유엔군사령부를 창설했다는 근거가 없습니다. 당시 한반도 전쟁에 참여한 미군은 사령관이던 맥아더에 의해 유엔군사령부라고 명명되었을 따름입니다"라고 말한다.

강의를 들은 참가자들은 집중했고 휴식시간을 반납하고 질문이 이어졌다. 유엔사령부가 "맥아더 사령관의 셀프작품"이라는 말이 통역될 때는 웃음과 박수가 터져 나왔다.

'공격적 평화주의'로 표현된 생소한 이론이 잘 진행되어 한반도의 전쟁이 종결되고 북미 수교가 이루어진다면 오키나와의 군비확장문제도 멈추기를 기대한다며 이렇게 극적 반전이 진행되고 있는 한반도의 상황을 오히려 부러워했다. 오키나와는 500년 동안 류큐왕국으로 있었고 줄곧 한반도와도 깊은 관계를 맺었지만 1872년 일본의 작은 현으로 재편될 때부터 일본의 작은 섬이 되었다.



▲ 오키나와 국제대학에서 강의하고 있는 이시우 씨.(오른쪽에서 두 번째)

© 강신천

35회 국제 반전 오키나와 집회

2018년 6월 23일 아베총리는 오키나와 평화공원추모식에 참여하였다. 그가 지나가는 길엔 경찰이 일렬로 서 있었다. 많은 경찰들 사이로 깃발을 들고 외치는 시민들의 모습이 보였다. 시민단체들은 아베수상의 참배는 물론이고 그의 오키나와 방문 자체를 반대했다. "아베는 미국의 편에 서서 오키나와를 기만하는 이중적이고 비겁한 정치인이예요. 그가 정말 아시아의 평화를 바란다고 생각하지 않아요." 아베수상을 태운 차량들은 철통 경비 속에서 빠르게 지나갔다. 우리 일행은 건너편에서 격렬하게 경찰과 대치하던 다카하시 토시오(高橋年南)씨, 도미야마 마사히로(豊見山雅裕)씨와 함께 오키나와평화집회에 참석하는 버스에 올랐다.

흔백의 탑 광장에서 사람들은 나무그늘에 삼삼오오 모여 앉아 도시락을 먹었다. 조용한 노래, 조용한 연설 그리고 조용한 집회는 세 시간가량 이어졌다. 집을 설계하다 이제는 평화를 설계한다는 건축가, 50년을 시민사회를 위해 헌신한 일명 레지스탕스 목사 부부, 폴란드에서 유학 온 유학생, 조선인 교포 4세, 한국전과 월남전과 오키나와 전쟁을 모두 경험한 늙은 미군도 집회에 참석하였다. 연설에 나선 이시우씨는 "김정은 위원장은 핵을 폐기하기 위해 핵을 개발했다"고 말하며 "핵을 평화의 무기로 사용할 수 있다"는 역설적인 상황으로 인해 "변화되기 시작한 남북미 관계를 비롯해 긴박하게 돌아가는 국제관계속에서의 일본의 입장과 평화운동의 과제를 평화적으로 이룰 수 있는 절호의 기회가 왔다"고 말했다.



▲ 국제반전오키나와 집회에서 연설하고 있는 사진가 이시우 씨와 통역중인 평화 활동가 오오무라(大村)씨.

© 강신천

우리 일행은 마지막 하루를 문학평론가인 아키라(玉代勢 章)씨 집에서 지냈다. 나하시에 있는 오래된 작은 집이다. 아키라 씨는 일본어와 영어 그리고 한국어를 혼합하는 독특한 방법으로 우리와 소통하였다. 그는 한국문학에 지대한 관심을 보였다. 특히 김원일씨의 작품 '어둠의 혼'을 스스로 번역해 읽으며 받은 감동을 이야기했다. "어머니는 '쌀 한 톨 생기지 않는 일'을 하는 아버지를 저주하고, 나는 아버지 죽음보다 배고픈 것이 더 서럽고, 아버지는 경찰서에서 싸늘한 시신으로 누워있어요." 남북대결을

핑계로 만들어 낸 민중의 비극적 풍경이다. 이 잔인한 풍경을 설명하던 그는 울고 말했다. "울지 않을 수 없어요. 저는 이 글을 읽을 때마다 매번 울어요."



▲ 우라소에 성을 방문한 일행. 맨 왼쪽부터 타마요세 아키라 씨, 오키모토 후키코(沖本富貴子), 이시우, 함민복.

© 강신천

2018년 4월 27일 판문점에서 일어난 문재인 대통령과 김정은 위원장의 만남은 이데올로기를 이용해 민중을 억압하던 거대권력의 실체가 사실은 아무것도 아닌 그저 사람과 사람의 관계성 회복 문제일지 모른다는 생각을 품게 하였다. 그렇게나 오랫동안 삶을 폐허로 만든 이데올로기의 벽도 그저 몇 사람이 얼굴을 맞대고 손을 잡으면 사라질지 모른다. 국가를 움직이는 거대한 폭력이 사실 작은 기만에서 시작된 것이며 동족을 가르는 비극을 만든 공포의 실체가 우리와 동일한 아주 평범한 사람들이 만들었다는 사실 앞에 서 있다. 오랫동안 미군과 일본정부 즉 제국주의와 맞서 싸워 온 오키나와 사람들도 다만 "우리가 사는 방식을 존중해주면 된다"고 말하는 것이다.

저작권자(c) 오마이뉴스(시민기자), 무단 전재 및 재배포 금지

今年2月に刊行された『行政学講義』（金井利之、ちくま新書）に、次の記述がある。

…（60年安保改定において）米国の基地自由使用を定める日米地位「協定」は、基本的には不平等のままでした。こうして、「本国」（米国）は「自治領土」日本国内の米軍基地に関して、高度の領域支配を維持することに成功しているのです。「本国」の支配領域は、三次元空間にも及び、横田基地をはじめとして、多くの空域は「本国」の領域支配のもとにあります。

さらに言えば、「本国」の軍人・軍属の活動に関しては、「本国」の支配が基地外に拡張します。例えば、米兵が日本国内で殺人・強姦などを犯しても、米国の許しが無ければ、日本は刑事司法権限を持たないのです。領域支配を超えて、属人的な治外法権が設定されているのです。また、米軍機が日本国内に墜落または「不時着」しても、米軍が現場を封鎖して、現場の領域支配を貫徹するので、本国の許しがなければ日本側は現場検証もできません。

こうして、在日米軍とは、日本の領域支配の及ばない、最大の「外国」になりました。…例えば、2017年11月にトランプ米国大統領が訪日しました。しかし、外国からの玄関口である、東京国際空港または新東京国際空港に、トランプ大統領は降り立つのではありません。そうではなく、「自治領土」に置かれた「本国」の出先機関である横田基地に着陸します。米国内での移動に過ぎません。横田基地という「本国」から陸路で、「自治領土」日本の帝国ホテルや霞ヶ関カンツリー倶楽部（ゴルフ場）などに行きました。

（「第2章、外界と行政 4、米国と行政 ④日米安全保障条約体制」）

最近、安倍政権に対して、「対米従属だ、米国の属国だ」という批判は、頻繁に聞かれるようになったが、ポツダム宣言を受諾し無条件降伏した戦後日本は、そもそも独立主権を持ったことは一度もなく、「国家」の体をなしていない、「属国」とさえ呼べない「米国の属領・領域」にすぎないと、金井利之は断じているのである。

国民には隠し続けられてきたことだが、日米安保によって米国（ダレス米大統領特使・当時）が、手に入れたのは「我々が望むだけの軍隊を、望む場所に、望む期間だけ駐留させる権利」であったのだ。

このように、憲法番外地は、何も沖縄だけの話ではない。

「日本の国土は、すべて米軍の治外法権下にある。」（横田空域の問題など）
「日米合同委員会の本質とは、米軍が持つ巨大な特権を、日本国民の目に触れさせたくない取決めを、全て密室で処理するために作られたブラックボックスなのです。」

ですから、日米合同委員会の協議といっても、最終決定権は米軍側が握っています。」

（『知ってはいけない 隠された日本支配の構造』矢部宏治2017、講談社現代新書）

世界に類を見ない特殊な対米従属体制が国民統合をむしろ破壊する段階に至ったいま、その矛盾が凝縮された場所＝沖縄において、日本全体が逢着している国民統合の危機が最も先鋭な形で表れているのである。

（『国体論 菊と星条旗』白井聡2018、集英社新書）

しかし、こうした日本の支配構造の本質が、可視化されるようになったのは、沖縄の民意を踏みにじる普天間へのオスプレイ配備と辺野古新基地建設、そして国家暴力が暴虐の限りを尽くした高江の無法地帯化などに対して、現場の決して屈しない直接行動が震源地としてあり続けるからであった。

思い起こせば、戦後民主主義の危機は、2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原発の事故、そしてその後の第二次安倍政権の成立とその施政によって、爆発的に表面化してきた。

原発事故はその発生に至る歴史的経緯を参照するならば、「原子力の平和利用」という国策が推進されるその仕方において、民主主義など一片も存在しなかったことを明らかにした。要するに、戦後民主主義社会の「民主主義」とは、イリュージョンにすぎなかったことを、あの事故は示してしまった。そしてその果てに、われわれはわれわれの国土を回復困難なかたちで傷つけたのである。

だが、日本社会の大勢はこの苦しい現実立ち向かうよりも、むしろ

そこに開き直ることを選んだのであり、それにふさわしい政治指導者が安倍晋三であった。彼に象徴される政治権力のあり方は、この矛盾を真つ当なやり方で解きほぐそうとするどころか、矛盾によって浸蝕された体制をあらゆる手段を用いて死守するものである。

…この状態の行き着く先は、何らかの意味での「破産」である。

否すでに、原発事故の被災地は「破産」を経験しているし、長期政権化した安倍政権の下での常軌を逸した国会軽視や虚偽答弁、三権分立の破壊等によって、議会制民主主義もまた「破産」しているとも見なしうる。

あるいは、こうした支配層の道義的破産と呼応するかたちで出現している、各種の差別感情の大っぴらな表出といった事態は、大衆レベルでの精神的破産の証左となっている。また、支配層と大衆をつなぐ位置にあるマスメディアも、退却に退却を重ねてきた。

要するに、上から下まで「破産」している。…

(『国体論 菊と星条旗』白井聡2018、集英社新書)

今年の名護市長選挙に対して、安倍政権が総がかりで、米軍辺野古新基地建設のために襲いかかってきた姿は、民主主義の根幹である選挙制度の「破産」であったことを想起しよう。

日本が巨大な米軍基地を受け入れている理由も、歴史的に二転三転してきた。それは、始まりにおいては敗戦の端的な結果であったのだが、「東西対立における日本防衛」へと転じ、日本への直接的な脅威という理由づけの説得力が薄れると「自由世界の防衛」へと転じた。そして共産圏が消失すると「世界の警察」による「正義」の警察行為のためであるとされ、この「正義」も怪しくなってくると「中国の脅威」、「暴走北朝鮮の脅威」への抑止力であるとされるに至った。これらの二転三転は、これら言われてきたことすべてが真の理由ではないことを物語っている。

つまり、対米従属の現状を合理化しようとするこれらの言説は、ただひとつの真実の結論に決して達しないための駄弁である。そしてその一つの結論とは、実に単純な事であり、日本は独立国ではなく、そうありたいという意思すら持っておらず、かつそのような現状を否認している、という事実である。

ニーチェや魯迅が喝破したように、本物の奴隷とは、奴隷である状態をこの上なく素晴らしいものだと考え、自らが奴隷であることを否認する奴隷である。さらにこの奴隷が完璧な奴隷である所以は、どれほど否認しようが、奴隷は奴隷にすぎないという不愉快な事実を思い起こさせる自由人を非難し誹謗中傷する点にある。本物の奴隷は、自分自身が哀れな存在にとどまり続けるだけでなく、その惨めな境涯を他者に対しても強要するのである。

深刻な事態として指摘せねばならないのは、こうした卑しいメンタリティーが、…第二次安倍政権が長期化するなかで、疫病のように広がってきたことである。

…明治維新以来形成されてきた、日本人の欧米人に対するコンプレックス（劣等感）とアジア諸民族に対するレイシズム、…

このコンプレックスとレイシズムの心理は、「アメリカに追いつけ追い越せ」の経済発展と、アジアにおけるアメリカの最重要パートナーとして、またアジアで突出して豊かな国となることによって、満足を与えられた。

したがって、結局のところ、アメリカが戦後日本人に与えた政治的イデオロギーの核心は、自由主義でも民主主義でもなく「他のアジア人を差別する権利」に他ならなかった。

(『国体論 菊と星条旗』白井聡2018、集英社新書)

米占領軍は、軍国主義日本を武装解除するために天皇（制）を存続させるとともに、ファシズムの軛からの解放を希求する民衆のエネルギーを「平和憲法」の枠に抑え込み、台頭する中国・朝鮮の人民解放闘争に対する軍事的出撃拠点として、沖縄を日本から切り離して軍政統治を続けたのである。

天皇（制）の存続、平和憲法、沖縄の米軍支配の三つは不可分一体の、戦後体制の出発点そのものであり、日本を属領化した日米安保体制に他ならない。

そもそも新憲法の草案では、「人民」と表記されていた人権の主体を、「国民」と書き直し規定し、国民以外を排除したことで、諸外国の近代憲法に比して国民主義的性格の強いものとして、日本国憲法は作られた。

こうして、戦前の国家主義、民族主義が潜在化して継承され、国民主義の

形で生き延びた。民族主義があいまいにされると、民族の加害という意味での戦争責任の問題が直視されなくなり、「(軍部の暴走で)自分たちも被害者だった」という戦争観が形作られた。

戦争責任を逃れ、「平和と繁栄」を謳歌した日本と表裏一体、コインの裏表である沖縄の米軍占領という事実は、日本国民から忘れ去られていった。

最高法規であるはずの日本国憲法に上位に、日米安保条約、地位協定、密約がある。こうしたことは、日章旗と星条旗をクロスさせて、ヘイトをかなり立てる「愛国=親米」右翼の跳梁跋扈を招いたこととは、無関係ではない。大田昌秀が自身の体験を通して告発した「醜い日本人」の極め付き、属領地の惨めな奴隷の姿である。

ここまで書いてきたところに、翁長雄志知事の訃報が届いた。属領を拒み、「子や孫へ、誇りある沖縄を残したい。」その志半ばで斃れ、一番無念なのは知事自身であったろう。

米軍によって東アジアの分断線に打ち込まれた棘を、一つひとつ抜き去る、国境を越えた民衆連帯こそ、その志を現実のものとする、平和体制構築のキーワードである。講演記録を整理しながら、心に刻んだことだ。

「沖縄イニシアティブ」によって緊張の緩和をはかっていく場合、重要な位置を占めているのが隣国の韓国との関係である。(中略) 沖縄は、…日本の歴史認識と韓国やアジア諸国のそれとを「架橋」できる立場に立っているからである。

…東アジアの「脅威と緊張」を緩和し信頼醸成の方向に歩むイニシアティブを、沖縄を拠点に作り出していかなければならない。

(『沖縄 憲法なき戦後』古関彰一、豊下楯彦 2018 みすず書房)

沖縄は、東アジアの矛盾を歴史的に負わされ続けるボトムであるがゆえに、「核心現場」である。天皇制ファシズムの戦争・戦後責任に対する歴史認識と今日的反省に立ち、沖縄における米軍基地撤去の闘いを通して、アジア平和体制構築の一翼を担っていきたいと思う。

記・高橋年男

イシウ 李時雨 (写真家) プロフィール

写真集『非武装地帯での思索』(1999) 『民統線平和紀行』(2003)
『UNC 国連軍司令部』(2013) 『済州・沖縄平和紀行』(2014)
写真展『韓国の対人地雷被害者』(1999) 『雪の上に咲く花』
『漢江河口』(2010)





李時雨 講演記録集

発行日 2018年8月15日

発行者 米軍基地に反対する運動を通して沖縄と韓国の
民衆連帯をめざす会

略称：沖韓民衆連帯（連絡先住所：那覇市泊3-13-16）